

# key person

## 西内染物店 西内清実さん

《右ページ下》 黒色をつくるにも複数の色を混ぜて深みを出す。赤色にも緑などの意外な色も使われている。《上写真左から》 地染めに使う刷毛／染料について説明してくれる清実さんの手／呉服店として扱う反物／染めた反物を蒸して色を定着させる蒸し箱



現在南相馬市内で旗指物をつくれるのは、「西内染物店」の一軒のみ。昔ながらの手作業で旗に向き合います。数多くの家の旗印を染めてきた仕事場を訪ねました。

### 百姓の仕事と ともにあった染物屋

かつては、農閑期の仕事として身近だったという野馬追の旗を染める「染屋」。しかし、暮らしの変化とともに、その営みの灯はだんだんと消えていった。今、野馬追の旗の伝統を守る西内清実さんは、今年で90歳。呉服屋を営む、南相馬で唯一の染物職人だ。  
「70年くらい前には24軒くらいあったねえ。高度経済成長で減っていった。他でやっていった旗もちで引き受けるようになったの」と話してくれたのは、妻の久子さん。かつては年に20枚もの旗指物をつくっていたが、近頃は出場者も減り、受ける依頼も制限している。今年の新作は数枚。しかし、夫婦に嫁の実恵さんも交えて染物の仕事について話してくれる様子を見ると、「最後の職人」の悲壮感はなく、一つひとつの旗についていきいきと話してくれる。

「いつまでも続けたいけれど、寄る年波には勝てないからな」という清実

さんの仕事を、今は実恵さんがサポートしている。

### 手仕事でしか 生み出せない躍動感

「絹羽二重に友禅染め」が西内さんが守ってきた方法で、とても手間がかかるが、仕上がりの美しさは格別だ。「表裏が同じようにきれいな色に染まるのは、手作業の友禅染めならでは。手で描いた模様は立体感や躍動感が出る。自分が染めた旗を見るのは嬉しいもんだよ。私は野馬追には出ないけれど、自分が染めた旗が出ているのを見えすっかりはまってしまった(清実さん)」  
旗印は、鮮やかな色のメリハリがものをいう。色が混ざらないようにしっかりと糊をつけて、使う色は何種類もの染料を混ぜて決めていく。旗帳や使いこまれた旗を参考にはするが、正解があるわけではない。言葉で伝わる古からの色の名を表現するために、時には半日も試行錯誤するという。

他にも、たくさんの工程がある友禅染めは全て天気や湿度の影響を受ける、自然とともにある作業だ。そのハイライトが「友禅流し」。春の天気の良い日に、水無川で糊を洗い流す。鮮やかな旗印が川面にゆらゆらと揺れる光景は、野馬追の季節が近づいてきたことを知らせる大切な風物詩になっている。

